

医事・文談 九百五十六 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その244
子規と漱石(五十三たび続)

長塚 節は、明治44年、病中雜詠(其一)に「喉頭結核といふ恐ろしき病ひにかかりしに知らざりければ心にも止めざりしを打ち捨ておかげ余命は僅かに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたぐうち騒がれて」の前文を持つ生きも死にも天のまにまにと平らげく思ひたりしは常の時なりき

往きかひのしげき街の人みなを冬木のごともさびしらに見つ
知らなくてありなむものを一夜ゆえ心はいまは昨日にも似ず

しかといはば母嘆かむと思ひつつただにいひやりぬ母に知るべく
なにしかも命悲しといはまくに答ふることは

我は知らぬに

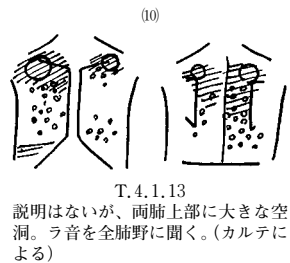
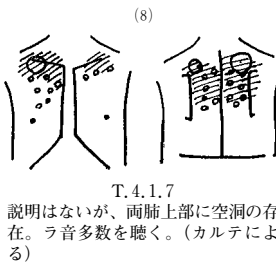
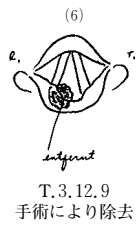
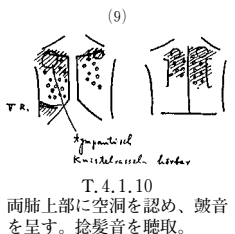
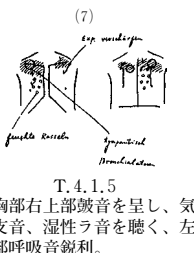
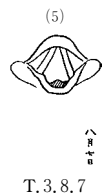
等、十二首の歌を詠じ、以後、入院、手術を受けながらも各地を遊歴し、大正4年2月8日、九州帝大医科大学附属病院の隔離病室に数え年37歳の生命を閉じた。

翌9日、久保教授、曾田以下5名の医員、平野屋主人、父源次郎、弟順次郎等が付添い、崇福寺に至り読経、焼香。のち市外火葬場にて荼毘に附す。

節の主たる死因は、肺結核であったろう。喉頭の症状と共に胸部の病変も、カルテに図示されていて、それにドイツ語で所見が記されている。当時の医師の観察眼がなかなか鋭いことが分る。以下に年次と図示所見を載せる。

「医報」の印刷面では、図も説明(すべてドイツ語)も縮小されて判読が困難かと訳語を加えたが、拡大鏡を用いれば読みとることが出来るかもしれない。

胸部のスケッチはすべて、打聴診によったものだろう。当時のレントゲンは遠距離撮影でない筈だから、空洞の存在などはたしかめられなかった



である。それを打聴診の所見から、ほぼ正確に空洞化を推測しているのだから、節の肺結核の急激な進展が見られる。胸部スケッチの左が前面、右が背面である。絶望は誰の眼にも明らか。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233